

## ゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティング再考—《死者》(1963)を中心に—

古舘遼 (東京大学)

ゲルハルト・リヒター (Gerhard Richter, 1932-) は、戦後ドイツを代表する芸術家である。これまで50年以上にわたり、絵画や写真、ガラスを用いたインスタレーションなど、多様な制作を展開してきた。その中に、フォト・ペインティングと通称される一連の絵画がある。

フォト・ペインティングとは、リヒターが写真を元にして描いた、主に1960年代の絵画を指す用語である。写真を忠実に写しとった絵画というイメージが付与されることにより、アメリカのスーパー・リアリズムなどと混同されたり、写真を絵画に落とし込む行為に重点が置かれ、制作の段階で作者の主観は介在せず、描かれた内容に特別な意味はないと誤解されたりすることも多い。こうした状況は、フォト・ペインティングの制作方法が注目されるあまり、個別の作品の研究が不十分であることを示している。

本発表の目的は、フォト・ペインティングを、その技法に注目して詳細に分析することを通して、これまでになされてきた解釈を見直すことにある。中心的な分析対象として、初期の代表作《死者》(1963)を挙げる。

まず、先行研究においてフォト・ペインティングがどのように定義されているかを概観する。その上で、「写真のような絵画」といったように、写真を元に描かれていることを念頭に置いた批評が多く見られることに注目する。そして、こうした評価がなされる背景について整理し、それらが必ずしも実際の作品に適合するものではないことを、《死者》を始めとした作品のディテールを検討することによって明らかにする。

続いて、フォト・ペインティングへの重要な視座として、「構図」の問題を新たに提起したい。《死者》は雑誌記事を元にしてしているが、主題となっている死者を写した写真だけでなく、記事の見出しの一部を含め、誌面が部分的に切断された形で写し取られていることが分かる。なぜ、写真の枠から逸脱し、雑誌記事を引用していることを誇示するかのように描かれているのかという点を、同様の手法で制作された他の作品と併せて考察する。

さらに、こうしたトリミングの手法を、アンディ・ウォーホル (Andy Warhol, 1928-1987) の初期の絵画作品およびシルクスクリーン作品との関連で論じる。これまで、リヒターとウォーホルの影響関係については、いずれも写真画像と関連のある絵画を制作していることや、事件や事故の犠牲者を主題とするといった観点から言及されてきた。本発表では、そこからさらに踏み込み、リヒターにおけるウォーホルの影響が、制作プロセスにまで及んでいたことを明らかにする。また、リヒターとウォーホルの作品の類似性を検討するだけでなく、相違点にも目を向けることで、リヒターのフォト・ペインティングに固有の特質も浮き彫りにしたい。

以上のような分析に基づき、本発表ではフォト・ペインティングを再定義する。そこから、リヒターの芸術におけるフォト・ペインティングの新たな位置づけを目指す。